

月の花挽歌 ～2. 酒とバラの日々～

2-3

緩んだ会話を下げるように、絶妙な間合いで冷酒が運ばれて来た。

「上爛の落ちが冷酒とはね。枝雀師匠が降りてきたのかな～」

堀内は仰ぐような素振りで囁すと、一件落着とばかりに、真紀とグラスを重ねた。

「ほら、少年の眼差し……」と真紀が冷やかした。

「君は不思議な人だ。君は可愛い人だ」

「あなたはどんな人？」

「信州の山猿」と堀内は言って、おどけた。

「あ、お猿さんの目だ！ すっかり騙された」

真紀は少女のように、お茶目に笑った。

「酒は自信があるんだが、ロマンスには、すぐに酔ってしまう質でね」とはぐらかす。

「ロマンス、もう一献差し上げます」

銀座の一流クラブのママだけあって、転じた話題に、粋なはからいをする。

「チェンジ ザ サブジェクト サンクス」

男がブロークンで突っ込んだ。

「フォーゲット イット！ ロマンス プリーズ」

好い加減の間でボケた女が注いだ冷酒を、男は口に含んだままに女を引き寄せると、狂おしいばかりにディープキスをした。

黄八丈の襟元から忍ばせてくる男の手に任せた女は、「ああ、甘露～」と濡れた唇で男の耳朶を咬んでから、ささめいた。

女の囁きの余韻を、男は再び唇を重ねて楽しむと、女を横たわらせて、乳房から放した手を陰部にすべらせた。

折も折、隣室に客が通されて、途切れ途切れに聞こえてくる話し声に、「中年の男が二人、若い女が二人……」

男は女の耳元で数え唄を歌うかのように来客数を推し量りながら、人差し指で陰核を四回小突いた。

首に絡めている女の腕が締め付けてくるのを潮に、男は女の中にゆっくりと漕ぎ出して行った。

「ディガー ディーン ディーンイエ」

「ドゥサオ ドゥーノ ドムフェウオ」

真紀と重なる度に、女杜氏の妹の麻里子が仕込みの際に酵母に聴かせた『バッハ無伴奏チェロスイート一番プレリュード(ヨーヨー・マの演奏)』の旋律が、高揚が高まるにつれ、決まって堀内の背骨に響いてくる。